



地域概要

紀北町島勝浦地区は、三重県の南部に位置する太平洋に面した温暖な地域である。地域の主な産業は漁業で、大敷網（定置網）、大謀網（小型定置）、一本釣り、刺し網などが営まれる。また、遊漁船や渡船業も盛んに行われている。また、リアス式の地形にあり、沿岸にはアラメや大型のモク類が繁茂する豊かな藻場が存在する。

しかし、近年徐々に磯焼けの状況がみられるようになり、3～4年前からは、藻場が殆ど見られないほど厳しい状況が続いている。また、藻場の消失に伴い、イセエビやサザエ、アワビなどの磯根資源が大きく減少しており、漁業への影響が懸念されている。

磯焼けの原因としては、植食性の生物として、ガンガゼなどのウニ類が多くみられる。また、ブダイやイスズミ、アイゴなどの魚類も大型で周年確認されるようになっている。

一方で、地区内の漁業者は高齢化が進んでおり、ほとんどが70歳以上の高齢者で、漁業の存続が危ぶまれる状況となっている。そのため、上記の課題への対策を行うにも人材が確保できない状況となっている。



磯焼けの状況

連携の経緯

当地区では漁獲⇒磯根？資源の減少や磯焼けが進んでいたが、対策を行うにも高齢化による人手不足が大きな課題となっていた。そこで、地域外の力を借りるため、三重県内で磯焼け対策の実績が高い「NPO法人SEA藻」に協力を要請した。

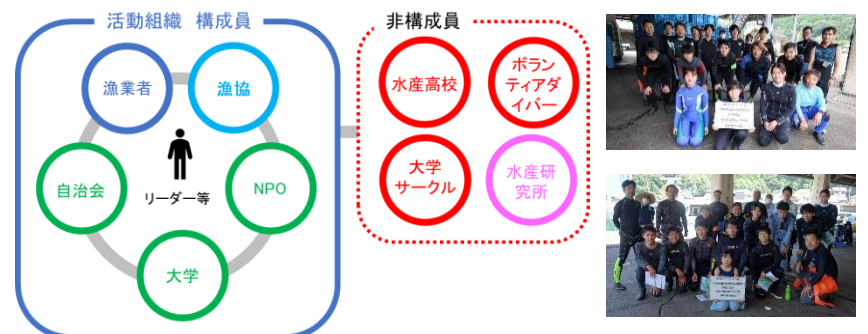
当NPOの代表は、取組の中心となっている三重大学や、協力関係にある水産高校の出身でもある。また、NPOはダイビング会社が母体となっており、環境保全などに興味のあるボランティアダイバーを集めることもでき、これらネットワークが現在の連携体制づくりに大きな役割を果たした。

連携体制の内容

当組織の体制は、漁業者・漁協・自治会・NPO・大学で構成した。また、大学サークル、水産高校、ボランティアダイバー、水産研究所が非構成員として活動に協力してくれる。各主体の役割は、以下の通り。

まず、活動方針や取組内容の策定は、構成員である漁業者・漁協・自治会が地元の海の現状に対して、今後どうしていきたいか目的・目標を設定し、NPOと大学が技術的な方針や取組容を決定した。また、取組は、NPOと大学が中心となり、それを他の構成員がサポートするかたちで進める。非構成員である大学サークル、水産高校、ボランティアダイバーは、主な活動となるガンガゼ除去を行うための人的な支援。さらに、

水産研究所は、藻場回復を促すための、種苗設置のための種苗を提供するなど、技術的な面でサポートしてもらっている。



主体	各主体の役割
漁業者	保全活動における作業及び技術支援。
漁協	事業の運営。各関係者との調整等。
大学	保全活動の主体。保全活動の技術支援。
NPO	保全活動の主体。保全活動の技術継承。
自治会	住民との連携・情報共有。活動への協力。
水産高校、大学サークル、ボランティアダイバー	保全活動における作業支援。保全活動の技術継承。
水産研究所	保全活動に係る技術支援や移植種苗の供給。

連携による取組内容

ここでは、連携における主要な取組である「ガンガゼ除去」の事例を紹介する。

本取組は、大学の藻場回復の研究成果に則った手法で行っている。その手法は、徹底したガンガゼ除去を行うことである。除去は、スキューバ潜水により手作業で行われており、潜水技術を持った人員が必要不可欠である。こういった一定の技術を有した協力者により、充実した取組に繋がっている。



ガンガゼ駆除

連携の効果と今後の方針

当地区では、漁業者及び地域住民の高齢化や人口の減少により、地域内の人員のみで取組を行うことができない状況にあった。しかし、以前から三重県内の藻場の保全活動に積極的に取り組んでいるNPOや大学、研究施設などとの連携により、高齢化した地域でも充実した取組を展開することができた。

また、この活動により地域にある宿泊施設が活用され、地域経済への貢献もみられる。さらに、漁業者も地域外から来てくれる人に対して、宿泊施設に魚介類を差し入れるなど、積極的に良好な関係を築こうとする姿勢も伺えた。こういった地域外から若者が来てくれることで、地域の活性化にも繋がっていると考えられる。

今後も漁業者の減少や高齢化によって、取組の継続が困難になる可能性が考えられる。そのため、隣接した地域でも同様の取組が行われていることから、今後は横の繋がりの強化も含め、より安定的に活動が継続できるよう検討を進めていきたいと思う。